

## 妙義山を巡る信仰

阪 本 英 一

### 1 はじめに

妙義山は赤城山、榛名山とともに上毛三山に数えられる名山である。ところが、赤城山には赤城神社があり、山麓の人々に赤城信仰が広まっている。榛名山には榛名神社があり、山麓だけではなく、広範囲に榛名信仰がある。両神社ともに水の神・農業神としての信仰がある。これに対して妙義山には妙義神社はあるものの、山麓の人々の信仰は薄い感がある。東方から朝な夕な眺めている者として、それが不思議でならなかったわけである。そこで、この機会に「素人の思い付き」を書き記して、今後の検討を期待するものである。

### 2 縄文人と妙義山

縄文時代の遺跡として、注目されている天神原遺跡は、横野ヶ原と呼ばれる中野谷の台地上にあり、環状列石をもち、その中に三本の石棒が立てられていた方向に妙義山がある。埋葬された人々の頭の向きも妙義山の方向であったことから、天神原遺跡に居住していた縄文人が、妙義山を聖なる山として意識し、信仰していたことが考えられる。しかも、発掘調査の中で彼岸には太陽が妙義山の真上に沈むことも確認され、三本の石棒の位置と一致していることから、縄文の人々がそのことを知っていたことに驚いたわけである。最近、栃木県の寺野東遺跡で報告された縄文人の暦がここにある。また、埋葬された頭の方からみて、彼らは死後、妙義の山の彼方に行くと思っていたとみられる。このことは、狩猟・採集を主とした縄文人の生活では、太陽の沈む聖なる山であり、三本の石棒を中心とした祭祀が行われたとみられるが、どのような祭祀が行われたかは明らかでない。しかし、妙義山信仰はあったと考えられよう。また、奇岩の山は狩猟・採集の生活では目印として重要であった。

東に隣接する松原遺跡は、天神原遺跡より古い時代の遺跡で、ここでは埋葬された死体の方向が、妙義山を意識していることが明らかとなったが、頭が浅間山の方向になっている事例も相当数あることが確認されている。このことは、妙義山への信仰のほかに浅間山の信仰があったこと

が考えられる。それには浅間山の噴火活動が働いていたものとみられる。浅間山は中野谷からは遠い山で、普通には別世界とみられていたと思われるが、盛んな噴火活動を見てその力強さに驚き、信仰されたものとみられる。しかし、中野谷から見る浅間山は、妙義山の右端から少し離れた程度の奥になる位置になり、妙義山に向かう時にはある場所までは必ず視野に入る山であるから、浅間山が信仰の対象になることは不思議なことではなかったかもしれない。縄文人の行動範囲は、ほぼ半径10kmの円内とみられるが、妙義山が見える範囲は、中野谷を中心にした時、東端は岩野谷地区の東の台地上にあたり、北は後閑地区、南は稻含山の麓の辺りまでが考えられる。その範囲が妙義山の全容をたやすく見られる地域であることは、中野谷を拠点とした縄文人の行動範囲として納得できる範囲である。

### 3 弥生人と妙義山

弥生時代になると、妙義山信仰はみられなくなる。しかも、弥生時代以後の妙義山信仰は、県内の名山といわれる赤城山や榛名山の信仰にみられるような発展はなかったようで、現在でも広がりには赤城山や榛名山と違うものがある。その理由は何だったのだろうか。縄文人が、奇岩の山・春分の日に太陽が沈む山として、死者の霊が天に上るとみていた聖地も、弥生人にとっては聖地にならなかったとみられるわけである。弥生時代になると、農耕を基本とする生活になることから、「水」にこだわることになり、水源をもたない岩山は意義を失ったとみられるわけで、その意味からみた妙義山には沼もなければ、有力な水源もない。しかも、夏の雷雲もこの山からは発生せず、浅間山の方向（碓氷峠）である。さらに、妙義山は岩石の山で上の方に木がなく、したがって緑の山ではなく、秋の紅葉も弱いとしたら、弥生人には信仰の山として見られなかったといえよう。幸せな死後の世界を願うことには、妙義山はふさわしくなかったとみられるわけである。

### 4 古代人と妙義山

古代、中野谷を含む碓氷川と鑓川流域にはある時期に物部氏が勢力をもっていたが、この地域を中心にして渡来人の移住があって、貫前神社や辛科神社の信仰が広がり、荒船山が渡来人の望郷の山として眺められたと言われるようになった。その頃、南にそびえる稻含山が信仰の山として現れる。稻含山は山容もきびしく、夏は雷雲の発生する山であり、雷鳴のものすごさと、雷雨の激しさは比較するものがないほどで、沼はないが、水の神、農耕の神として信仰され、稻含神

社になっていったものとみられる。貫前神社も雷神を祀っているが、これは稻含山の雷神を祀っているものとみることができる。中野谷の東南に位置する御荷鉾山は、高崎周辺から中毛にかけては「御荷鉾の三束雨」といわれる山であるが、中野谷の縄文人にとっては世界の果てであり、太陽の出る山として、一種の信仰をもって眺めた山であったとみられる。北東の榛名山は、遠く、別の世界であり、中野谷に住む縄文人には信仰はなかったとみられる。（榛名山が農耕の神として、この地で信仰されるようになったのはずっと後のことである。）榛名山も雷雲の湧く雷の山であり、榛名湖をもつ「水のある」山として、農耕の神となった。このようにみたとき、妙義山は「水がない」ことが古代の人々の信仰の対象から外れていった大きな理由の一つとみることができる。

## 5 中世の妙義山

中世になると、修験道の山として、信仰されるようになったが、その由来や広がりについては明らかでない。そのころ『神道集』にみられる赤城山の「赤城縁起」や、それに類するものとして榛名山の「満行権現由来記」「船尾山縁起」のような長編の「縁起」がつくられるが、妙義山には「縁起」はみられない。

## 6 近世以降の妙義の神

近世以降妙義の神は、古くは波己曾神社とされ、妙義には七波己曾といって七つの波己曾神社があったというが、妙義神社の波己曾殿がその中心にあたるものとみられる。中世以来、神仏習合があり、修験道の山となって妙義の神が信仰されることとなり、「妙義大権現」が現れる。白雲山にある「大」の字を表すものである。また、神仏習合によってこの地に寺が建てられたのが、別当白雲山石塔寺である。石塔寺は、近世になって東叡山寛永寺の座主輪王寺の宮の隠居所となつて、修験道の性格は消え、栄えたと言われる。民間には「火伏せの神」として妙義講ができた。妙義講は、「火伏せの祈祷」として広く関東一円に広まったといわれ、元文から天保の頃（18世紀半ばから19世紀半ば頃）がもっとも盛んであったと言われる。

「火伏せ」を中心としたのは、福島から栃木方面の人たちが多く、「作神信仰」は東京三多摩地方から埼玉方面が多いという。養蚕、鼠除け、雷除け、雹除けなどであるという。また、祭神菅原道真公に因んで、正月初卯の日の卯の刻（5時～7時）に参詣して、「出世開運」の祈祷をする者も多く、比較的近い人々では碓氷・甘楽・多野方面が、遠隔地では埼玉の人が最も多いと

いう。しかし、地元の妙義町の人々は、一部の人を除いて参拝は少なく、人生の節目ごとに参拝して祈願することはないようで、集落の産土様で済ませている。それは、上野寛永寺の隠居寺になって住民とのつながりが少なくなったり、明治維新时期には廃仏毀釈によってダメージを受け、一時衰えた時期があったことが大きく影響しているものと考えられる。

## 7 妙義山以外の信仰の山

**御荷鉾山** 中野谷からは東南にあたり、太陽の昇る山であり、二つの山はオッパイを思わせる山容である。この山は雷雲の発生する山であり、この山から降り出した雷雨は「御荷鉾の三束雨」と呼ばれるほど雨足がはやいことで知られている。中野谷の縄文人にとって、この山は東の果てとして猟の時の目印となった山であったとみられる。

**稻含山** 中野谷から南方にそそり立つ山で、夏は緑の色が濃く青い山、秋は紅葉、冬は雪で真っ白になる。しかも、雷雲が湧き、雷鳴と雷雨で乾いた大地を潤してくれる山である。近世以降、雨乞いの山であった。山麓の村（甘楽町秋畑地区）では「米を作ってはいけない」という禁忌をもつ。稻含神社では、1月7日に「お筒粥の神事」があって作占いが行われ、5月5日の山開きには、マユダマの奉納と、これに関連して養蚕の豊作を願うため、「マユダマを借りる」ことが行われ、翌年二倍にして返すことが行われた。

**浅間山** 中野谷松原遺跡や大下原遺跡の土壌墓には、明らかに浅間山を意識して埋葬したとみられる事例が少なくない。浅間山は活火山で、縄文時代にしばしば噴火したものと考えられるので、その様子から力強さに祈りを捧げたとみられる。浅間山の方角は、碓氷峠と同じで、峠付近は雷雲が発生する所で、「峠の三束雨」の言葉があるくらい雨足が早く、ここの熊野神社は「お田植え神事」や、「作占い」を行い、雨乞いの時にはここから「ご神水」をもらって来て、また、峠講を組織し、春には代参を立てて雹霰除けの御札をもらって来て、村の辻に立てたこともある。このように、碓氷峠は浅間山と重なり合う形で信仰されていたとみられる。

**榛名山** 山は大きく、緑の山、紅葉、雪ともにすばらしく、雷雲も雷鳴も激しいが、雷雨は気流の流れから直接中野谷に降ることは少ないが、気流が渦巻くようになって、稻含山・碓氷峠・榛名山の三つが合流することがあり、その時はものすごい雷雨となる。しかし、榛名山は中野谷から遠く、この地の縄文人には信仰されなかったものとみられ、榛名山が農耕の神として中野谷の人々に信仰されるようになるのは、近世以降のこととみられる。

**赤城山** 形の整った山として、はるか彼方に見える赤城山は、中野谷からははるかに遠く、全くの別世界で、信仰としては現在も見られない。

## 8 妙義山をめぐる民俗

妙義信仰は、明治維新後の混乱もあって、地元の信仰がいま一つであるのに対して、遠隔地の人々の信仰、特に講を組織しての信仰に特色がみられる。

- ① 火伏せの神ということから、妙義町高田地区や安中市秋間地区などでは、二つ子参りといって、母親が数え年2才の子供を背負ってお参りに行くことになっていて、火傷しないよう祈願に行くものだと言われていた。
- ② 妙義の白雲山に「大の字」があり、条件の良い日には中野谷あたりから見えることがある。見えたからといっても中野谷の周辺では特別の信仰があるわけではなく、現在でもこれについての信仰行事は何もないというわけである。
- ③ 中野谷より東方に隣接する上間仁田や下間仁田では、雨乞いの時、碓氷峠と稲倉山、榛名山の三カ所へ御神水をもらいに行く。もらった水は地面に下ろした所に雨を降らせるものと言われる、運搬役になる若者は厳しく注意されて出発したものである。これには妙義山は入らなかったが、理由はすでに述べたとおりで、妙義山の西北の碓氷峠が水源なので、そちらが信仰されるわけである。
- ④ 妙義山の中央の山・金洞山中之岳の中腹に祀られている中之岳神社には大黒様も祀られていて、甲子講を組織して人々の信仰を集め、中でも千葉県・茨城県の漁師の信仰が深く、泊まり込みで参拝し、早朝の行にも参加している。船の進水式にも宮司を招くほどであるという。さらに、大黒様のご眷属はネズミといわれて信仰されているが、ネズミの害に苦しめられている中野谷やその周辺の養蚕家にはあまり歓迎されず、ネズミを捕るヘビ（諏訪神社）やネコ（熊野神社のネコ石）が歓迎された。
- ⑤ 近年、大晦日から元旦にかけての「二年参り」で「三社参り」と称するお参りが、貫前神社、中之岳神社、妙義神社の三社を回って行われるようになったが、自動車社会の流行のようなもので、信仰面から見ると古代以来のものとは意味が違うものである。

## 9 おわりに

松原・天神原両遺跡の発掘調査の成果を聞いているうちに、素人の好奇心が思いつかせたことをならべてみたが、あらためて検討してみる必要がある。それには、各分野の関係者が、それぞれ持っている資料を出し合って語り合うことが基本だと気付いたわけである。